

9月に入り、朝夕は幾分の肌寒さを感じるようになりました。ススキ(写真1左上)の穂が顔を出し、トチノキ(写真1右上)やヤマボウシ(写真1左下)の果実も熟し、秋らしくなってきました。また、カツラの黄葉(写真1右下)も一部で始まり、落葉から香ばしい香りが漂っています。アケボノソウの蕾(写真2左上)も少しずつ膨らんでいます。

★ 開花情報

ナンバンギセル(南蛮煙管)ハマウツボ科ナンバンギセル属(写真2右上)

葉緑素を持たない寄生植物で、ススキやサトウキビ等イネ科植物や、ショウガ科のミョウガ等に寄生し、宿主から栄養を得ています。8月終わり頃から15~20cmの花径を伸ばし、淡紅紫色の花を下向きに咲かせます。種名に「南蛮」とつくため、帰化植物と誤解されがちですが、これは花の咲く姿を、南蛮人の煙管に例えて名付けられたもので、古い時代から人々に親しまれています。万葉集では「道の辺の 尾花が下の 思ひ草 今さらさらに 何をか 思はむ」と歌われており、「尾花」がススキ(写真1左上)で、「思ひ草」が本種といわれています。現代風に訳せば、「道端のススキの下に生えているナンバンギセルのように今更何を思い悩むことがあります。」という意味合いで、恋心を表現しています。まさに「時代変われど恋心に変わりなし」ですね。

場所：第3駐車場奥

オタカラコウ(雄宝香)キク科メタカラコウ属(写真2左下)

近似種で小形のメタカラコウ(雌宝香)に対してがっしりとして力強く見えるので雄宝香と呼ばれています。またタカラコウは、根茎の香りが防虫剤等や香料にされる竜脳香に似ていることに因みます。山野の沢筋などの湿地に生える多年草で、フキに似た根生葉を出します。花は8~9月、1~2mに伸びた茎の先に花序をだし、黄色い花を下側から順に咲かせます。日本以外にも中国やシベリア、ヒマラヤ等に自生します。

場所：薬草園上

サルスベリ(猿滑、百日紅)ミソハギ科サルスベリ属(写真2右下)

淡い色で滑らかな幹肌からサルスベリと名付けられました。中国大陸南部原産の落葉小高木で、よく庭や公園などに植えられます。花は6枚の縮れた花弁がフリルのようでとても愛らしく、白色や紅紫色、紅色等変異が多く、園芸品種もたくさん出回っています。夏の間次々と花を咲かせるため、ヒヤクジツコウ(百日紅)とも呼ばれます。葉は対生または互生で時にコクサギ型葉序と呼ばれる2対互生になります。

場所：多目的広場他

コマツナギ(駒繫)マメ科コマツナギ属(写真3左上)

野原や土手、海岸などに普通に見られる草本状の落葉低木で、高さ50~90cmになりますが、地を這うこともあります。葉は奇数羽状複葉で互生し、茎は強健で「馬をつなぐほど丈夫」と例えて名付けられました。コマトドメやウマツナギの別名もあります。花は7~9月、葉のわきから3~10cmの花序を伸ばし、約4mmの淡紅紫色の花を密につけ、秋まで次々に咲かせます。

場所：センター池

ポタンヅル（牡丹蔓）キンポウゲ科センニンソウ属（写真3右上）

本州から九州の日当たりのよい山野に自生する落葉つる性の半低木で、ポタンに似た葉を持つため、ポタンヅルと呼ばれています。花弁を思わせる白い4枚の萼と長い雄しべが特徴的で、類似種のセンニンソウの花によく似ています。葉は3出複葉で小葉には不揃いの鋸歯があります。

場所：正面ゲート向かい

★園内開花状況まとめ

咲き始め	ヌルデ（写真3）他
見頃	ナンバンギセル（写真2）、オタカラコウ（写真2）、サルスベリ（写真2）、コマツナギ（写真3）、ポタンヅル（写真3）、シリブカガシ（写真3）、マツカゼソウ、ハナツクバネウツギ、キョウチクトウ、タラノキ 他



写真1左上 ススキ（ファミリー広場前） H28.9.4



写真1右上 トチノキの果実（第2駐車場前） H28.9.4



写真1左下 ヤマボウシの果実（やまぼうし橋） H28.9.4



写真1右下 カツラ黄葉（ツバキ園） H28.9.4



写真2左上 アケボノソウの蕾（薬草園） H28.9.4



写真2右上 ナンバンギセル（第3駐車場） H28.9.4



写真2左下 オタカラコウ（薬草園横） H28.9.4



写真2右下 サルスベリ（苗畑） H28.9.4



写真3左上 コマツナギ (センター池) H28.9.4



写真3右上 ポタンヅル (正面ゲート下三叉路) H28.9.4



写真3左下 ヌルデ (第3駐車場下園路沿い) H28.9.4



写真3右下 シラカガシ (城前橋向い) H28.9.4